

第1回

10代がえらぶ 海外文学大賞



10代がえらぶ 海外文学大賞

10代のみなさんにもっと海外文学を！
だって、面白い作品がたくさんあるから！
そんな思いから生まれた文学大賞です。

対象になるのは、前年（2024年）に刊行された10代が主人公の海外文学。その条件を満たしていれば、小説はもちろん、漫画（グラフィックノベル）も、絵本も、詩集も、入ります。

今回は記念すべき第1回目です。5月に幅広い世代のみなさんからの**一次投票**を募り、票の多かった16冊を選びました。それに6名の選考委員の推薦図書6冊をあわせ、全22冊から、10代のみなさんに特におすすめしたい7冊がノミネートされました。

二次投票の主役は、10代のみなさんです。次のページにあるQRコードから、ぜひ投票フォームにアクセスしてみてください。7冊のノミネート作品のうち、1冊でも読んで、それが面白かったらぜひ投票を。なにか一言書きたい方には、なんでも書きこめる欄を設けています。

この小冊子には、全22冊の紹介文が載っています。書いたのは、作品を翻訳した翻訳者の方々。ぜひ参考にしてください。

みなさんの投票をお待ちしています！



10代がえらぶ 海外文学大賞

第二次投票 ノミネート7作品

第一次投票選考委員（五十音順）

金原瑞人（翻訳家・法政大学名誉教授）

河出真美（書評・ZINE制作）

三辺律子（翻訳家）

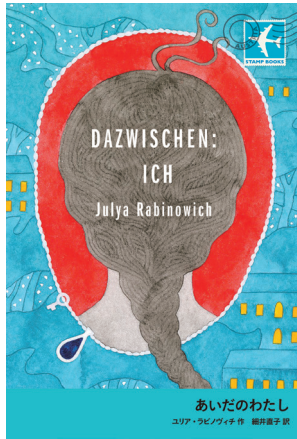
奈倉有里（ロシア文学翻訳家）

鳴川浩子（玉川聖学院中等部・高等部司書教諭）

野崎 歙（放送大学教授、東京大学名誉教授）

投票は
こちらから





1
第二次投票
ノミネート作品

『あいだのわたし』
ユリア・ラビノヴィチ 作
細井直子 訳
岩波書店

ある日突然、日常を根こそぎ奪われて、荷物一つで外国へ逃げなければならなくなったら？ 15才の少女マディーナは、戦争になった国から命がけで家族と逃げてきました。難民として認定されるのを待ちながら、学校へ通い、新しい言葉をおぼえ、役所へ行く父親の通訳をし、ときには周囲の心ない言葉や態度に傷つきながらも、親切な友だちや大人の助けを借りて、この国で力強く生きていこうとします。けれども新しい環境になじもうとするマディーナと、祖国の古い価値観をかたくに守ろうとする父親とは、しだいにすれ違っていきます。この国にとどまれるのか、それとも……？ 経験する様々な出来事や思いのたけを、マディーナは日記につづります。 (細井直子)



2
第二次投票
ノミネート作品

『すばやい澄んだ叫び』
シヴォーン・ダウド 作
宮坂宏美 訳
東京創元社

1984年の春、アイルランドの小さな村で、15歳の少女シェルは孤独な毎日を送っていた。母親を亡くして以来、酒浸りの父親や、生意気な弟、幼い妹の世話に明け暮れていたのだ。気が紛れるのは、幼馴染のデ克蘭とブライディと一緒にくだらない話をしたり煙草を吸ったりしているときぐらいだったが、やがてデ克蘭と深い関係になり、自分が妊娠していることに気づく……。未婚の十代の妊娠という重いテーマに真正面から取り組んだ、カーネギー賞受賞作家シヴォーン・ダウドの鮮烈な長編デビュー作。20年近い時を経て、ようやく日本でも紹介された。悲しくも美しい詩的な文章と、悩める若者に常に寄り添ってきた亡き作者の熱い思いが胸を打つ。 (宮坂宏美)



3

第二次投票
ノミネート作品



『ソリアを森へ』

チャン・グエン 作
ジート・ズーン 絵
杉田七重 訳
鈴木出版

人間に虐待されるクマを目撃した少女チャーン。それがきっかけで、自分は野生動物を守る仕事につこうと決意を固める。身体を鍛えることから始まって英語の猛勉強まで、あらゆる努力を重ねた末に保護センターのボランティアに採用されたチャーンは、そこで密猟者に親を奪われたマレーグマの赤ちゃんと出会う。チャーンはその子をソリアと名づけ、「わたしが森へ帰す」と誓って、自然のなかで生きていけるよう訓練を重ねながら、ソリアが安全に暮らせる場所を探す。ベトナムの自然保護活動家チャン・グエンの体験をもとにした自伝的グラフィックノベル。ジート・ズーンが描く熱帯雨林の美しさに心を洗われるも、人間の生々しい加害の跡が目には痛い。(杉田七重)



4

第二次投票
ノミネート作品



『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・ 森の中の林』

鄭執 作
関根謙 訳
アストラハウス

原作者鄭執は若い意欲的な作家。「ハリ〜」の主人公はフランスで華人女性と結婚した青年、中国を知らぬ新妻に少年時代のエピソードを語る。土着宗教に染まった超理性的風土に、癡癡みみたいな「伯父さん」と故郷の人々が生き生きと再現され、自らの宿病と対決した過去が蘇る。「モンテ〜」は苛立つ若者の哀しい変身譚。若者の行き詰まった思いや父との絆の切なさが大雪の瀋陽のレストランで展開していく。「森の〜」は文革以前から現代に至る家族三代の愛の葛藤をミステリアスな殺人を絡めてテンポよく語る長編。三作いずれも東北の大都市瀋陽が鍵で、そこに鄭執の情念が結ばれる。一人称の語りの変容や物語時間の交錯など挑戦的な文体も魅力。(関根謙)



5

第二次投票
ノミネート作品『ぼくの心は炎に焼かれる
植民地のふたりの少年』ビヴァリー・ナイドゥー 作
野沢佳織 訳
徳間書店

1951年、ケニア。白人の大農場主の息子、マシューは、キクユ人の使用人で2歳年上のムゴを兄のように慕っていた。ムゴは、仕事の合間にマシューの遊び相手になり、様々な危険から彼を守り、旦那様に叱られないようかばってあげていた。ところが、土地の奪還と自由を求めるキクユ人の一団がひそかに仲間を集め、白人への対決姿勢を示したすと、白人の大人たちはキクユ人への敵意をつのらせ、反逆の疑いのある使用人を容赦なく収容所へ送りこむ。そしてマシューとムゴも、ある事件をさかいに引き裂かれてしまう。ふたりが交互に語る思い、葛藤、苦しみを通して、独立へ向かう植民地ケニアの混沌たる日々と、人々の心を焼く炎が読者の胸にせまる。(野沢佳織)



6

第二次投票
ノミネート作品

『闇に願いを』

クリスティーナ・スートーンヴァット 作
こだまともこ・辻村万実 訳
静山社

女子刑務所で、窃盗犯の母親から生まれた少年ポンは、13歳になるまで法律によって刑務所で暮らさなければなりません。いつか光あふれる街を治める英雄、提督のもとで働きたいという夢を持っています。そんなある日、思いがけないことから脱獄に成功しますが、必死に身を隠して生きのびるポンを、刑務所長の娘ノックが執拗に追いかけます。タイを思わせる美しい街や、深い山のなかの寺院でくりひろげられる、はらはらどきどきが止まらない冒険物語であると同時に、本当の正義とはなにか、本当の英雄とはどういうひとのことかを、考えさせられる物語。タイにルーツを持つ作者が描く街の風景が、とても魅力的です。(こだまともこ)



7

第二次投票
ノミネート作品

『わたしの名前はオクトーバー』

カチャ・ベールン 作
こだまともこ 訳
評論社

オクトーバーは森のなかで、父さんやフクロウの雛といっしょに暮らし、野生の森と、そこから生まれる物語を作るのがだいすきです。ところが、11歳の誕生日に、自分のせいで父さんが大けがをしてしまい、4歳のときに森を捨てて出ていった母親とロンドンで暮らすはめになります。野生など感じられない殺風景な街にも、編入した小学校にもなじめず、父さんが許してくれないのではという不安にさいなまれる毎日ですが、隣の席の男の子、ユスフといっしょに、テムズ川の岸边に打ち寄せられた宝物を探す「泥ヒバリ」になったことで、ふたたび新しい物語を紡ぐことができるようになります。少女の揺れうごく胸のうちをこまやかに綴った、カーネギー賞受賞作です。（こだまともこ）



そのほか、第一次投票で選ばれた 15作品をご紹介します。

2025年5月1日(木)～5月14日(水)におこなった
第1回「10代がえらぶ海外文学大賞」の一次投票では、
約300名の方から、のべ約500冊の
対象作品への投票がありました。
票の多かった16作と6名の選考委員の推薦書6作をあわせた22作のうち、
ノミネート作品以外の15作品をご紹介します。



『アドニスの声が 聞こえる』

フィル・アール 作
杉田七重 訳
小学館

第二次世界大戦下のロンドン。みなが安全な田舎へ疎開するなか、ジョーゼフはひとり、空襲の激化する都会に送り出された。他人の家に預けられ、新しい学校になじめずに孤独な日々を送るうちに、ジョーゼフは動物園に取り残された一頭の雄ゴリラ、アドニスと心を通わせる。だが、もし空襲で檻が壊されれば、猛獣であるアドニスは人間に危害を加える可能性があるため、危険が園に迫った際には、処分するよう命じられる。その重責を担うのは、彼を大切にしてきた園長と、新しい飼育係となったジョーゼフ。果たしてジョーゼフは友に銃を向けられるのか。これまでの児童文学にはない、想像を絶する衝撃のラスト。ゴリラと人間——果たして「猛獣」はどちらなのか。（杉田七重）



『命をつないだ 路面電車』

テア・ランノ 作
関口英子・山下愛純 訳
小学館

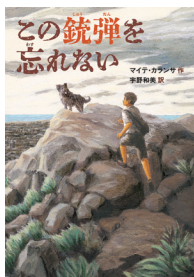
第二次世界大戦中のイタリアの首都、ローマで、ある朝突然、ナチスドイツ軍による大規模なユダヤ人強制連行が始まる。12歳のユダヤ人少年エマヌエーレは、目の前で母を連行され、ひとり路面電車に逃げこんだ。車内はつねに密告の恐怖と隣り合わせ。だが、車掌にかくまってもらい、座席に縮こまりながら乗客たちを観察するうち、ユダヤ人に味方する勇気ある人たちの姿も見えるようになり……。命をつないだ路面電車での緊張の2日半と、その後も続くつらい戦争の日々が、実話をもとにスリリングに描かれる。まだ日本ではあまり知られていないイタリア・ムッソリーニ政権下でのユダヤ人の暮らしや迫害について、驚きとともにくわしく知ることができる一冊。 (山下愛純)



『この村にとどまる』

マルコ・バルツァーノ 作
関口英子 訳
新潮社

表紙の、水面から先端だけが突き出した教会の鐘楼。これはイタリアとオーストリアが国境を接する南チロルに実在する湖（レジア湖）の景色だ。本書は、この幻想的な湖の底に沈んだ村と、そこで生きてきた家族の物語。主人公のトリナーの夢は、教師になって子供たちに言葉の美しさを教えること。ところが理不尽な政策に翻弄され、母語を奪われ、やがて戦争が激化していき……。それでも屈することなく、村にとどまりつづけた自らの生涯を、生き別れた娘に向かって、「あなた」と呼びかけながら静かに語っていく。その語り口調からにじみ出る深い愛情と悲哀に、心が揺さぶられる。読み終えて本を閉じたとき、様々な土地で権力の横暴によって踏みつぶされてきた人々の営みへの想像力が格段に豊かになっているにちがいない。(関口英子)



『この銃弾を 忘れない』

マイテ・カランサ 作
宇野和美 訳
徳間書店

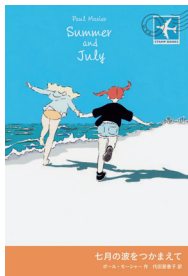
戦争が始まって以来、行方しれずとなっていた父さんが捕虜収容所にいるという知らせを受けたミゲルは、母さんからとんでもないことを頼まれます。父さんに食べ物を届けに行き、もしできるなら救いだしてほしいのです。忠実な牧畜犬のグレタだけを道づれに、あらゆる危険がひそむ内戦下のスペイン北部の山中を200キロも歩いて、ミゲルは父さんを救うことができるのでしょうか。困難を乗り越えながら、恋もし、さまざまなことに気づき成長していく13歳の少年ミゲル、そして犬のグレタを応援せずにはられない冒険物語です。ハラハラドキドキの旅は、忘れられない夏の思い出になることでしょう。 (宇野和美)



『ささやきの島』

フランシス・
ハーディング 作
エミリー・
グラヴェット 絵
児玉敦子 訳
東京創元社

霧につつまれた島マーランクには、死者がとどまるといわれている。マイロの父は、そんな島から死者の魂をつぎの世界へと送る渡し守で、死んだ人の靴をはずかって船を出す。ところが、とつぜん父が殺されて、死者の魂を乗せた船は、14歳のマイロの手にゆだねられた。異界の海で、魔術師をともなった追手との攻防をくりひろげながら、マイロは死者の魂と心を通わせながら進んでいく。父からは渡し守に不向きだといわれていたマイロが、はたして務めをはたせるのか？ 死者の魂はどうなるのか？ 英国の人気絵本作家エミリー・グラヴェットが描きだす幻想的な挿絵とともに、少年の手に汗握る冒険と、心にしみいる成長の物語をどうぞ。 (児玉敦子)



『七月の波をつかまえて』

ポール・モーシャール 作
代田亜香子 訳
岩波書店

切ないけど楽しくてたまらない、あの夏の終わりの感じ。そんな宝石みたいなきらめきがつめこまれた物語です。刊行当時にいただいた感想をこの場でお借りしますと、イラストの早川世詩男さん「もう、泣けて泣けて……このお仕事がおわるのがさみしいです」、営業担当者さん「物理的に(?)キラキラしていて悲しいと嬉しいが混ざりあって、最初はなんでサマーは私(ジュイエに絶賛感情移入中)なんかをこんなに構ってくれるんだろうと思ってたら、サマーもどれだけ救われていたのかを知ってカンペキ! 涙がとまりません」。こんなに太陽と海を感じられて胸が苦しくなるほどやさしい作品をほかに知りません。大好きです。(代田亜香子)



『スラムに水は流れない』

ヴァルシャ・バジャージ 作
村上利佳 訳
あすなろ書房

水は命に直結しています。でも、家のなかの蛇口をひねればきれいな水が流れてくる日本と違い、主人公ミンニが住むインドの大都市ムンバイのスラムには、水はほとんど流れません。共同水道に長時間並んでやっと手に入れた水も、煮沸しなければ飲めないのです。しかも、水が原因で一家はばらばらになり、たった十二歳の少女の肩にさまざまな責任や重圧がのしかかってきます。果たしてミンニはどう乗り越えるのでしょうか。差別や貧困、水といった今だれもが考えるべきテーマを軸に、希望や夢、隣人愛、そして「水マフィア」というサスペンス要素もからめて、ミンニの成長を描く青春ストーリー。ぜひ日本の若い読者に読んでほしい一冊です。(村上利佳)



『少年の君』

玖月晞 作
泉京鹿 訳
新潮社

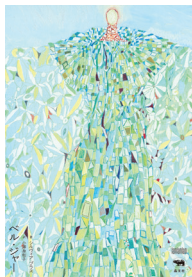
大学受験を目前に控え、いじめの標的になってしまった少女の前に現れた、社会の片隅で生きる傷だらけの不良少年。交わるはずのない二人の奇跡のような出会いが、お互いの世界を少しずつ変えていく。ビルの屋上から見下ろす街の灯り、ひまわり畑に囲まれて歩く線路沿いの道、夜風に吹かれて見上げる星空……そんな密やかな恋と連続暴行事件、そして殺人事件の関係とは。超学歴社会と過酷な受験戦争、格差社会、凄惨な暴力、絶望と希望の崖っぷちで、哀しい罪と衝撃の真実が織りなす、せつない青春サスペンス。——君を守りたかった。ただそれだけ。読んだあと、きっと誰かを大切にしたいくなる。そんな一冊です。(泉京鹿)



『ベビー・シッターズ・クラブ 2』

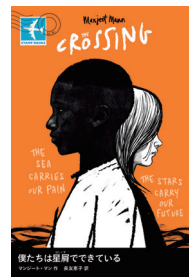
クラウディア、
なりたい私になる!』
アン・M・マーティン 作
山本祐美子 訳
ポプラ社

ベビー・シッターとは、大人たちが外出する近所のお家に向向き、子守りをしなが留守番をすること。アメリカの10代にとっては身近なバイトのひとつです。クラブの立ち上げを会長クリスティの視点で描いた1作目に続き、今回は副会長クラウディアの視点で物語が進みます。7年生(13歳になる学年)のクラウディアは日本人の両親を持ち、アートとおしゃれが大好きな女の子。苦手な勉強、超天才の姉との関係、気づいてもらえない片思い……と悩みが尽きません。ある日、ベビー・シッター中にあやしい無言電話がかかってきます。電話の正体は世間を騒がせている宝石どろぼうと関係がありそうで…? クラウディアが直接こちらに話しかけてくるような文体のおかげで、まるで自分がクラブの一員になったかのようにのめり込んで読み終えてしまいますよ! (山本祐美子)



『ベル・ジャー』
シルヴィア・プラス 作
小澤身和子 訳
晶文社

本書は1963年にイギリスで出版された、一人の詩人の自伝的小説。出版直後に著者は自ら命を絶つが、その後世界的ベストセラーに。19歳のエスターが感じた「自分らしく生きられないのか」という人生における葛藤と、不条理な世の中への嫌悪感を、研ぎ澄まされた精密なメタファーで描いた作品。友達は一人もいないし、人を見下す、なのになぜか他人とは思えない「孤高のバッドガール」エスター。死が充滿する物語に、生きることの輝きや滑稽さがみなぎる。約60年前に書かれた作品だが、現在でも多くの若者の心を捉えてやまない。作品に登場する重要なモチーフがTikTokでもバイラルしているので「#figtree」でチェックしてみてください。(小澤身和子)



『僕たちは
星屑でできている』
マンジート・マン 作
長友恵子 訳
岩波書店

イギリスの高校生のナタリーは、難民支援のためドーバー海峡横断泳に挑戦することを決心する。一方、アフリカのエリトリアで高校を卒業したばかりのサミーは、父親を殺され、無期限の徴兵から逃れるため、祖国エリトリアを脱出。さまざまな困難を乗り越えて、ようやくフランスのカレーにたどり着いたサミーは、ナタリーと運命的な出会いを果たす。しかし、亡命申請は冷酷にも棄却され……。決して希望を手放さず進むふたりに、運命は微笑むのだろうか。物語前半は、ナタリーとサミーのモノログが交互に登場する形で進行し、ふたりが会ってからではダイアログになり、頁をめくる手が止まらない。コスタ賞児童書部門受賞作、カーネギー最終候補作品。(長友恵子)



『ぼくたちは
宇宙のなかで』
カチャ・ベーレン 作
こだまともこ 訳
評論社

ぼく、フランクは十歳、弟のマックスは五歳。自閉スペクトラム症のマックスは、生まれてから一言もしゃべらず、人混みに出るとかんしゃくを起こして「溶けて」しまいます。ぼくは、そんな弟が恥ずかしかったり、癩にさわったりしますが、そのあとで自分は最低だという気持ちにさいなまれます。ところがある日、突然の悲劇がフランクたちを襲います。どん底に落ちてしまった家族が再生する日は来るのでしょうか。宇宙や暗号、友だちと野原で遊ぶのがだいすきな、わたしたちのすぐとなりにいるような男の子が語る、家族再生の物語。英国の児童文学界に彗星のごとく現れた作者のデビュー作です。(こだまともこ)



『ぼくの中にある光』
カチャ・ベーレン 作
原田勝 訳
岩波書店

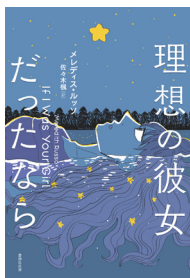
イングランドの海辺の小さな町。父親との暮らしに満足していた少女ゾフィアの家には、親同士の交際の結果、都会からやってきた、同じ11歳の少年トムとその母親が同居することになる。海で泳ぐのが好きで、いつも元気いっぱいのゾフィア。内向的で、暗闇と物音におびえるトム。なかなかわかりあえなかった二人は、新しい命の誕生をきっかけに距離を縮め、互いの強さを認めると同時に自分の弱さを知っていく。二人主人公の一人称語りによってそれぞれの感情や思考に分けりながら、海と風、闇と光などの繊細な描写が、たえず読者の五感を刺激する。カチャ・ベーレン独特のシンプルで繊細な文体が魅力。(原田勝)



『ラッキーボルト号の冒険』

クリス・ウォーメル 作
柳井薫 訳
徳間書店

だれでも家族ともめる日はある。昔イングランドで家出した男子には、港へ行って「見習い」として帆船に乗りこむという手があった。12歳ならOKで、年をサバ読む子もいたらしい。これはそんな時代の、リアルなようでマユツバも多い物語である。海でも島でも、恐ろしいこと不思議なこと、悲しいこと凄まじいことが次々起こる。ごちそうも宝の地図もある。私は手紙のところが好きだった。おそらく読んでいううちに、うっかり泣いたりブツと笑ったり、恐怖や悔しさにふるえたり呆然としたりするだろう。だから一人のときに読むことをすすめる。そうすれば他人に白い目で見られることもない。それが、この本を英語から日本語に翻訳した者からの、ささやかなアドヴァイスだ。(柳井薫)



『理想の彼女だったなら』

メレディス・ルツン 作
佐々木楓 訳
書肆侃侃房

「普通の」人生を生きる。ただそのために、日々の人間関係をリスクとして慎重に管理せざるをえない人たちがいる。それは生活を無味乾燥にし、疲弊させる。主人公アマングもその一人だ。理由は彼女がトランスジェンダーであることではなく、社会のがわにある。私たちは、よく知らない人たちを奇異の目で見たり、一方的に危険視したりしていないだろうか。事実にもとづかない不安を煽る言葉を無批判に受け入れ広めていないだろうか。アマングの物語はフィクションであってもそこには真実がある。彼女の高校生活が未来のためのリスク管理ではなく、大切な現在になってゆくのを見届けてほしい。(佐々木楓)

(いじめや両親の喧嘩や自死の描写、性暴力の話題も含まれるので、コンディションと相談しながら読んでください)



第一次投票選考委員より

まずは今年の選考委員を辞退してごめんなさい。翻訳の仕事が超多忙で引き受けられなかったのですが、そのあたりの事情は秋以降にくわしくお知らせします。ともあれ、候補作品を少しずつ読み進めているので、トークイベントや授賞式までには読みきって、何かお話しできそうです。どうぞよろしく。(越前敏弥)

ぼくは中学生の頃、内向的な優等生でした。高校生の頃、暗い感じのいやなやつでした。浪人・大学生の頃、麻雀とパチンコが好きで、妙に気取ったなまけ者でした。大学院にいて翻訳家になったのですが、中学校からいままですと本を読み続けてきました。それもほとんどが海外の小説です。そしていまも読んでます。(金原瑞人)

ノミネート7作品を決定するため、選考会が行われた。どんな集まりになるのか見当もつかなかったけれど、蓋を開けてみれば、読んだ本について語り合う、とても楽しい時間だった。この7冊の本が、読書の楽しさはもちろん、こうやって本について語り合うことの楽しさをも運んでくれれば、こんなにうれしいことはない。(河出真美)

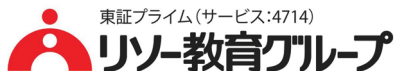
今回の22冊はYA、大人向け小説、グラフィックノベル、ファンタジーなどいろいろなジャンルがあり、舞台となる国もヨーロッパ、北米、アジア、アフリカとさまざま。10代が主人公の海外文学と一口で言っても、幅広く、面白いものがたくさんあると再認識しました。世の中、新しいものが次々出てくるけど、読書は捨てたもんじゃないと思う！(三辺律子)

対象作品もノミネート作品も読んでいない作品が思った以上に多く、せっせと読んだのですが、どれもこれも面白いです！この22冊以外の対象本、選考委員の訳書、さらに今年出版されている海外YA。読みたい本が積みあがりすぎて、もうわけわからない状態。でも楽しいっ！皆さんと一緒にもっともっと海外YAを楽しみたいです。(鳴川浩子)

ケニア、スペイン、アイルランド、エリトリア、タイ、オーストリア、アメリカ——世界に存在するさまざまな場所も、存在しない架空の場所も、どこかよくわからない場所もある。平和な土地も危険な土地もある。でも、こんな主人公たちとなら恐れずにどこへでも行ける。そんなふうに見える本がたくさんあって、とても楽しい読書でした。(奈倉有里)

世界の国々の十代は、かつてこんな試練をかいくぐってきたのか。そして現在も日々、こんな冒険を生きているのか。そう思うと、読みながら興奮を禁じ得ない作品ばかりです。それをこの国の十代が読んだなら、どれほどの刺激を受け止めるだろうと想像すると、いよいよ興奮が増すばかり！(野崎敏)

読書が一生の友だちになるよう、
応援しています



<https://www.riso-kyoikugroup.com/>



主催：一般社団法人青少年読書推進機構

X：10daikaigaibk

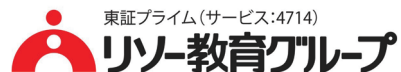
bluesky：10daikaigaibungaku.bsky.social

Instagram：10daikaigaibungaku

一般社団法人青少年読書推進機構は

「10代がえらぶ海外文学大賞」のために設立された社団法人です。
お問い合わせは10daikaigaibungaku@gmail.comまでお願いします。

読書が一生の友だちになるよう、
応援しています



<https://www.riso-kyoikugroup.com/>



主催：一般社団法人青少年読書推進機構

X：10daiigaibk

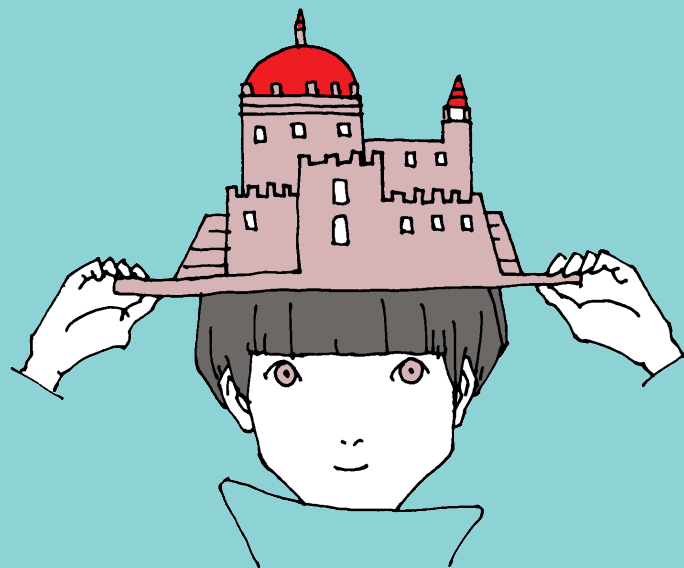
bluesky：10daiigaibungaku.bsky.social

Instagram：10daiigaibungaku

一般社団法人青少年読書推進機構は

「10代がえらぶ海外文学大賞」のために設立された社団法人です。

お問い合わせは10daiigaibungaku@gmail.comまでお願いします。



第1回

10代がえらぶ
海外文学大賞



10代がえらぶ 海外文学大賞

10代のみなさんにもっと海外文学を！
だって、面白い作品がたくさんあるから！
そんな思いから生まれた文学大賞です。

対象になるのは、前年（2024年）に刊行された10代が主人公の海外文学。その条件を満たしていれば、小説はもちろん、漫画（グラフィックノベル）も、絵本も、詩集も、入ります。

今回は記念すべき第1回目です。5月に幅広い世代のみなさんからの**一次投票**を募り、票の多かった16冊を選びました。それに6名の選考委員の推薦図書6冊をあわせ、全22冊から、10代のみなさんに特におすすめしたい7冊がノミネートされました。

二次投票の主役は、10代のみなさんです。次のページにあるQRコードから、ぜひ投票フォームにアクセスしてみてください。7冊のノミネート作品のうち、1冊でも読んで、それが面白かったらぜひ投票を。なにか一言書きたい方には、なんでも書きこめる欄を設けています。

この小冊子には、全22冊の紹介文が載っています。書いたのは、作品を翻訳した翻訳者の方々。ぜひ参考にしてください。

みなさんの投票をお待ちしています！



第一次投票選考委員より

まずは今年の選考委員を辞退してごめんなさい。翻訳の仕事が超多忙で引き受けられなかったのですが、そのあたりの事情は秋以降にくわしくお知らせします。ともあれ、候補作品を少しずつ読み進めているので、トークイベントや授賞式までには読みきって、何かお話しできそうです。どうぞよろしく。
(越前敏弥)

ぼくは中学生の頃、内向的な優等生でした。高校生の頃、暗い感じのいやなやつでした。浪人・大学生の頃、麻雀とパチンコが好きで、妙に気取ったなまけ者でした。大学院にいて翻訳家になったのですが、中学校からいままですと本を読み続けてきました。それもほとんどが海外の小説です。そしていまも読んでます。
(金原瑞人)

ノミネート7作品を決定するため、選考会が行われた。どんな集まりになるのか見当もつかなかったけれど、蓋を開けてみれば、読んだ本について語り合う、とても楽しい時間だった。この7冊の本が、読書の楽しさはもちろん、こうやって本について語り合うことの楽しさをも運んでくれば、こんなにうれしいことはない。
(河出真美)

今回の22冊はYA、大人向け小説、グラフィックノベル、ファンタジーなどいろいろなジャンルがあり、舞台となる国もヨーロッパ、北米、アジア、アフリカとさまざま。10代が主人公の海外文学と一口で言っても、幅広く、面白いものがたくさんあると再認識しました。世の中、新しいものが次々出てくるけど、読書は捨てたもんじゃないと思う！（三辺律子）

対象作品もノミネート作品も読んでいない作品が思った以上に多く、せっせと読んだのですが、どれもこれも面白いわ！この22冊以外の対象本、選考委員の訳書、さらに今年出版されている海外YA。読みたい本が積みあがりすぎて、もうわけわからない状態。でも楽しいっ！皆さんと一緒にもっともっと海外YAを楽しみたいです。
(鳴川浩子)

ケニア、スペイン、アイルランド、エリトリア、タイ、オーストリア、アメリカ——世界に存在するさまざまな場所も、存在しない架空の場所も、どこかよくわからない場所もある。平和な土地も危険な土地もある。でも、こんな主人公たちとなら恐れずにどこへでも行ける。そんなふうに見える本がたくさんあって、とても楽しい読書でした。
(奈倉有里)

世界の国々の十代は、かつてこんな試練をかいくぐってきたのか。そして現在も日々、こんな冒険を生きているのか。そう思うと、読みながら興奮を禁じ得ない作品ばかりです。それをこの国の十代が読んだなら、どれほどの刺激を受け止めるだろうと想像すると、いよいよ興奮が増すばかり！
(野崎敏)